

『種を蒔く人』のたとえ (マコ 4:1~9)

種を蒔く人が種まきに出て行きました。腕を広げて種を蒔きました。道端、石だらけで土の少ない所、茨の中に、落ちた種は、実を結びませんでした。他の種は良い土地に落ち、多くの実を結んだというのです。私たちは、この譬えでどこに注目するのでしょうか。蒔かれた種がどのような土地に落ちて、その結果どうなったかということに注目したり、良い土地に蒔かれた種でも実りに違いがあるということに注目するのではないのでしょうか。そこで、私たちは、自分ほどの土地か、あるいは良い土地でもどの実りの得られる土地か、と考えたりするのです。

ところで、この新共同訳の文章はギリシア語の原文の表現とは異なります。まず、実りに至らなかった3種類の種の結末は単数形で過去形の動詞で記され、一方実りに至った種は複数形で未完形動詞で記され、「成長し続け」「実を結び続けた」と訳せるのです。この譬えは、種が様々な場所に落ち、その中で良い土地に落ちた種だけが実を結んだ、と述べているのではないのです。種を蒔く人は良い土地、畑で腕を広げて種を蒔きました。少しの種は畑の周りの土地(道端、石だらけで土の少ない所、茨の中)に落ち、多くの種は畑に落ちました。また、原文では、収穫も全体として30倍、60倍、100倍と、ますます実りが増えていった、と記しています。つまり、種の多くは良い土地に落ち、成長して、実を結び、土地全体で、30倍、60倍、100倍と、実りが爆発的に増えていったのです。実りを結ぶ種の生命力に焦点を合わせています。「種を蒔く人はいつも豊かに実ってくれることを願って畑に種まきする。しかし様々な状況があって、どんなに頑張っても不作の時はある。でも、いつも失望で終わってしまうわけではない。収穫の喜びの時は必ずやって来る。だから神さまを信頼して、時期が来たら種を撒く。そして実りの喜びにあずかれば、『良かった、良かった』と喜び合って神さまに感謝する」と言うのです。

イエスの周りにいる人たちは、病に苦しんでいる人、悩みや辛さに打ちひしがれている人、罪人とされた人、社会から疎外された人、でした。その人たちに対して、その人たちの状態をよくよく理解した上で、イエスは「あなたたちは畑に蒔かれた小さな一粒の種であるように自分のことを思っているかもしれないが、神さまの支配が実現しようとする今、その一粒の種には、今あるがままで、それぞれに30倍、60倍、100倍という約束がある。だから、どのような苦境にあろうとも決して希望を失うことはないのだ。」と話しているのです。この譬えで言われているのは、私たち一人ひとりの生を是認している神さまに、私たちは自らを委ねていくことができるということなのです。